



Title	古典期前期マヤにおける国家形成の研究：三足円筒土器と「テオティワカンの影響」 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	今泉, 和也
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13395号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/74564">http://hdl.handle.net/2115/74564</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Kazuya_Imaizumi_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：今 泉 和 也

主査教授 小 杉 康  
審査委員 副査 准教授 高 瀬 克 範  
副査 教授 吉 開 将 人

## 学位論文題名

古典期前期マヤにおける国家形成の研究  
— 三足円筒土器と「テオティワカンの影響」 —

### 当該研究領域における本論文の研究成果

古代マヤ社会の研究は、碑文研究によって具体的な歴史像が提示されてきたが、その内容は戦争や政権・王朝の交代などの政治体制に関わるものが中心であった。メソアメリカにおける古典期前期は多くの都市国家が形成される時期であり、その中でもマヤ地域では古典期前期後半に、古代メキシコにおいて出現したテオティワカン文明との関連が顕著になる。これがいわゆる「テオティワカンの影響」であるが、碑文研究はその契機が西暦 378 年の「シヤフ・カック」という人物がティカルに「到着」したことであることを示している。メソアメリカ、特にマヤ地域における古典期におけるこのような政治史的な理解を、本研究では考古資料の分析に徹することで初期国家形成の問題として再構築する研究であると位置づけることができる。その成果は以下の三点に認められる。

第 1 点は、従来、マヤ地域においては先古典期後期から古典期初頭までの期間が都市国家形成の時期であると捉えられ、続く古典期前期（西暦 250－600 年頃）は各都市国家及び都市国家間の関係が複雑化する段階であるとされてきたが、本研究では古典期前期全般を初期国家形成期として捉え直し、一部の都市が内発的に国家形成にいたる原初（一次）国家形成期と、既存国家の影響のもとで周辺の都市が国家化を進める二次国家形成期との二段階で進行することを提示した点である。さらに、古典期前期後半のマヤ地域における多くの都市の国家形態への移行（二次国家形成）は、北部地域にあっては内発的に達成された原初（一次）国家（ティカル、カラクムル）に誘発されたものであり、南部地域では外発的に形成された二次国家（カミナルフユ、モンターナ）によって周辺の都市が国家へと変貌したものであることを具体的に明らかにした点である。

第 2 点は、テオティワカン様式遺物・遺構といった考古資料の分析に徹することにより、碑文研究の成果を踏まえつつも、その内容を検証し、文字資料にはあらわれてこない地域的な全体性をカバーした解釈を提示できたことである。特に本研究の中核をなすテオティワカン様式遺物である三足円筒土器の分析は、現在中米の 5 カ国、及びアメリカ合衆国や日本などの多くの国で保管されている考古資料であるが、それらを膨大な時間を費やしながらも悉皆的に実見・調査するといった研究手法は、理化学的な分析が盛行する近年の研究動向に対して、あらためてその有効性とさらなる方法論的改良の必要性とを再考させる契機になった。特に 71 タイプとして分類・提示された、出土地が明確で考古資料としての資料価値が高い 262 点の三足円筒土器類資料は、今後の同種の研究における基礎データとして、多くの研究

者によって活用されることが期待される。

第3点は、原初国家である都市国家ティカルが、「マヤ化したテオティワカン様式遺物・遺構」を模範的国家儀礼の「物質化したイデオロギー」として機能させて、周辺の諸都市を「銀河系構造」の都市国家連合へと二次国家化する初期国家形成過程として古典期前期を評価したことであり、今後の当該研究領域におけるさらなる研究・議論を深化させるものと評価される。

### 学位授与に関する委員会の所見

審査の過程では、碑文研究の結果を相対化する目的でなされた考古資料の分析結果の解釈において、部分的にはあるが碑文研究における結論を前提としてしまっている点が指摘された。また、テオティワカン様式遺物である三足円筒土器の分析において、製作地と製作者とを判定する基準とその証拠の提示が、必ずしも十分にはなされていない点が指摘された。また今後の課題として、三足円筒土器以外のテオティワカン様式遺物・遺構についても本論文で実施された三足円筒土器の分析と同程度に研究を深める必要があることが指摘された。口頭試問ではこれらの点について、今後の研究において自ら克服するための方法的な展望が示された。審査委員会は申請者がこれらの課題を十分に遂行する意欲と力量を有することを認め、また本論文の研究結果が当該研究領域に対して大きく貢献するものであることを確認した。

以上の審査の結果、審査委員会は全員一致して、本論文の著者である今泉和也氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。